

## 論文要旨

授業空間としてのホームの発見と可能性

—小学校家庭科における実践記録再読を通して

濱崎タマエ

本論文の目的は、学校教育に過剰に期待され続ける能動性主義が子どもの「生」の自由にもたらす影響を教師である筆者自身の実践記録に現れた子どもの授業経験に定位しつつ、省察するなかで、むしろ受動性が満つる授業空間としてのホーム(home)が子どもの生の自由を保障する可能性を明らかにすることである。

ここにいう能動性主義は、近年、頻発する「主体的な学び」といった語句が含意する、自由意志を持ち、能動的に行為する自律した人間像に支えられた、主体形成における能動的側面を強調する態度を指す。学校は、全ての子ども的人間的成長を促すことが期待された教育空間である。ところが、現在の学校空間を覆う、強固な能動性主義に彩られた教育の営みは、子どもの声、とりわけ、ヴァルネラブルな声の在所を見えにくくしている。

学校は子どものヴァルネラブルな声に応答し得る教育の空間となり得ているのだろうか。本論文の問題意識は、子どもと対峙せざるを得ない、現場教師としての痛みを伴うこの疑問に根差している。

以上の目的と問題意識のもと、本論文は、実践記録に現れた子どもの授業経験に定位し、省察する研究方法を「再読」実践と位置づけ、以下の5章より構成するものである。

1章では、「空間と経験」が孕む両義性と教育の意味を考察した。空間と経験は、関与する主体のあり様によって、両義的な相貌をみせる。制度としての学校教育は、機能主義的な計算された空間と経験の編成を至上とし、これと親和的な能動性をより望み、受動性の価値を疎外する。一方、モノ・コト・ひと等による媒介作用＝mediationを特徴とする教育の営みには、子ども自らが関与する、生きられた空間と経験が立ち現われざるを得ない。それは、幼児の遊びのように、与えられ計算された空間のなかにおいても、「他者移行」する自らの空間を創り出し、生きられた空間と経験を創出し得るからである。ここに、授業空間としてのホームの可能性をまず見取った。

2章では、教育の営みとホーム概念とが節合可能かを考察した。特に、再読事例である家庭科という教科に馴染深いホームが孕む政治的概念の観点から批判的に論じた。その上で、子どもの声に根差すなかから、政治的概念としてのホームとは別様の人間の生における位相に注目する必要を提示し、授業空間に現れ出るホームの特質を考察した。すなわち、授業は、その特徴である、モノ・コト・ひと等による媒介作用によって3C's (care, concern, connection) の要素を生成し、これが満つる空間(=home)のなかで、子どもは、生の安堵と自由を保障され、生きられる空間を創出するのではないかと論じた。

3章では、授業空間としてのホームがどのように立ち現われているか、93年、97年、2000年の3つの事例を再読実践した。受動的経験の価値、モノ・コト・ひと等による媒介作用が生成する3C'sの要素が生成する様相、受動的経験の現れ出る授業空間としてのホームが呼び込む他者の他者性と出会う可能性等を各事例から導いた。

また、90年代という時代の教育状況がヴァルネラブルな声に顕著に映し出され、能動性主義に傾斜する学校空間のなかで子どもの授業経験が大きく変容していったことが明らかとなった。「能力」に由来する教育の一般的な原義の捉えが、この傾斜の一要因であり、もう一つ別の生を養う営みという捉えが必要とされているのではないかという新たな課題を把握した。

4章では、生を養う営みとしての教育の実現可能性を25年前と23年前の卒業生2名、当時の子どもの声を傍らで聴き取ってきた、元養護教諭らが語る、授業経験の痕跡を追うインタビュー調査によって考察した。浮かび上がったのは、教え一学びにおける非対称の関係構造における教師の無自覚な他者表象の暴力性と、にもかかわらず、子ども自らが教師の計算された空間に穴を穿ち、自らが生きられる空間の実践を創出していた事実であった。

この現れが授業空間としてのホームであり、それは、子どもの生の自由を保障する「自由の実践」の空間となり得るだろうと論じた。

5章は、自由の実践としての授業空間のあり様と学校教育における実現可能性をモンテッソーリ教育と大人の科学クラブを展開する科学教育の実践家2名のインタビュー調査によって考察した。その結果、授業におけるモノ・コト・ひと等の媒介作用を活性化する援助者、及び、媒介者たる有機的知識人としての教師役割が、授業空間としてのホーム創出の鍵となることを論じた。そして、今後、そのような役割を果たせる教育実践の積み重ねが、大きな課題となることを最後に提示し、本論文を結んだ。